大谷ゆかり歌集『ホライズン』

高山邦男

情感の小箱

大谷ゆかりさんは、二〇一七年の第十七回心の花賞を受賞された。竹柏会の中で、今、最も勢いのある歌人の一人である。

最初に大谷ゆかりという歌人を意識するようになったのは、平成十九年度の作品評を担当していたとき、この歌集にも収録されている次の歌に出会ったときである。

・薔薇姫にひれ伏すごとく陽は落ちて目を光らせる星の騎士団

やや少女漫画っぽい雰囲気で、メルヘンチックな装いの歌だが、確かな実景が土台にある。言い方を変えれば、ごく普通の情景に擬人化というドラマを持ち込み、独自の詩情を作り上げている。この作歌スタイルはこの歌集においても大谷さんの最も得意とする作歌法である。

・遠足の子らを渡らす公園のアーチの木橋しずかなちから

・黄金の楽器得たりと秋風が公孫樹の列をしきりに揺らす

・晴れた朝、車輪きらきら町をゆくあれは二つのまあるい心

・海風が苛めているにちがいない荒地にのこる一軒の家

一首目、「遠足の子供」に呼応して、木橋に見つけた「しずかなちから」という質感が見事である。二首目、公孫樹を楽器に見立てて、映像的に一瞬の風景をドラマチックに描く。三首目、「二つの」として、自転車を想像させ、車輪を「まあるい心」と表現し、その場の明るい気分を巧みに表現している。四首目、「苛めている」と断定せずに「にちがいない」とする微妙な距離感が歌に情感を与えている。いずれの歌にも擬人法が用いられているが、しっかりと対象に寄り添っている心があり、アミニズム的存在感が歌の情感を高めている。

大谷さんの歌は、日常の何気ない出来事や場面を歌った歌が比較的多いのだが、巧みに詩的情景へと変容させてゆく。

・坂道に自転車をおし水無月のおもき空気の奥へ分け入る

・時を待つ卵のなかを思いおり豆球ひとつ灯る寝室

・丸き背を五つ連ねて桟橋の結び目となる春の釣り人

・夜なべする君へうどんの満月が傾かぬようゆっくり運ぶ

一首目、下の句への展開が心理的なドラマを感じさせ、こころの質感がある歌。二首目、「時を待つ卵」という比喩が秀逸。三首目、「五つ」という数詞から「結び目」そして「春の釣り人」という展開が見事。四首目、本の帯にも掲載されている代表歌というべき歌。「満月が傾かぬように」という見立てに、二人の関係と心情の小ドラマがある。歌集の収録歌はいずれも完成度が高く、短歌という小箱に大切な自分の情感を落とし込んでゆく繊細な作業を思う。技巧的には、比喩、見立て、ドラマ性などに特色があり、「憧れの人にあこがれなくなって虹が消えればすべて青空」という歌のように結句へ至る展開、構成に秀でている。紹介しきれないが、職業詠や地元の三重県伊勢を素材にした秀歌も多い。さらに飛躍してゆく力に満ちている第一歌集である。